

# ソークラテースの死と哲学

霞 信三郎

紀元前三九九年の春、アテーナイ (Athēnai) の法律によって毒杯をのまされて、当時「最もすぐれた人物であり、さらに、知恵と正義において比類ない人物 (tōn tote hōn epeitathēmen aristou kai allos phronimōtaton kai dikaiōtaton)」であるとされたソークラテース (Σωκράτης = Sokrates 470/69 ~ 399 B.C.) は、七十才を一期に、その波瀾に富んだ生涯を閉じた。その死は、刑死という悲劇的なものであった。にもかかわらず、かれの態度にも、言葉にも解放感があふれ、従容自若として、目前に迫っている死に対して恐怖感など全くなき、幸福そうな様子がありありと見える気高いものであった (eudaimōn gar moi hanēr ephaineto, kai tou tropou kai tōn logōn, hōs adeos kai gennaiōs eteleuta,...)。<sup>(五八)</sup>

ソークラテースが、その刑死を従容自若、解放感と幸福感とによって迎え、人々にとって、悲しみの極みであるべきことを清冽なよろこびとし、幸福な心に満ちあふれることができたのは何によるのであろうか。

一、まず、かれに、犯罪者意識がなく、自分は善き人 (τὸ ἀγαθὸν ἢ τὸ ἀγαθόν) だという確信に立っていたからである。このことに関しては、すでに、「ソークラテースの死をめぐる二、三の問題」(弘前大学「人文社」<sup>(五九)</sup>「会」二六号「哲学篇」) という、わたしの小論文の中でもふれているが、——かれは、「ソークラテースは犯罪者である。かれは青年を腐敗させるもの、国

家の信ずる神々を信じないで、他の新しい鬼神を信ずるものである (Sōkratē phésin adikein tous te neous diaph-theironta kai theous hous hē polis nomizei ou nomizonta, hetera de daimonia kana.) との罪状を、あやまねるものであるとして、法廷において、堂々と弁明を試みていることから知ることができる。

かれは、まず、自分を目して、「ソークラテース以上に賢明なものはない」と、巫女を通して、デルポイ (Del-phoi) の神託 (chresmos) がのべたことを (ancien oum hē Puthia médena sophóteron enai.)、いかなる意図のもとに発せられたのか、その真意をはかりかねて、当時、知者＝賢者 (sophos) といわれていた政治家たち (politikoi) や詩人たち (poitai)、手工業者たち (cheirontechnoi) を訪ねまわった。

とくに、神託が、かれを目して、最も賢明なるもの (sophotatos) であるといっているのは、自分が、つねに問題にしている、人間にとって、もっとも大事な、「善く生きること (τὸ εὖ ζῆν = to eu zen)」とはいかなることであるかについて、知恵あるものであるということの意味していることなので、そのことについて、国家の安危を一身に背負っている政治家や、靈感的な詩人や、技能者として、自分の仕事に熟達していることをもって、あらゆることに通曉していると自負している手工業者たちに質ねてみた。しかるに、かれらは、それについて答えることができず、無知 (amathia) であった。そのうえ、かれらは、その無知であることを自覚してさえないなかった。ソークラテースは、善くあることについての知識 (epistēmē) と自然科学的知性 (nous) とは嚴格に区別し、また、異なるものでもあることを強調すると同時に、人間にとって、もっとも大事なことは、美しく生きることであり、正しく生きることであり、また、それは、善く生きることであるとし、「善く生きることと、美しく生きることと、正しく生きることとは同じである (to eu kai kalos kai dikaios hoī tauton esin)」が、要は、人間にとって、美にして善なること (kalokagathia) とはいかなることであるかということを真に知り、それによって生きることであるとした。

しかも、思いみるに、かれは、そのことについて、本当は何にも知らない。ただ、他の人たちよりも、かれが、一寸すぐれたところがあるとすれば、——すなわち、神が、かれを指摘して、最も賢明なものであるといったのは、かれのよう  
に知恵に関しては、何のとるべきところのなうものであると自覚したものである (hoi houtos humón, ó anthrópoi, sophótatos estin, hostis hōspēr Sōkratēs egnoûken hoi oudenos axios eai tēi alētheia<sup>(1111a)</sup> pros sophian.) のことであつて、真  
に賢明なるものは、神のみであり、神が神託においていおうとしてゐるところのものは、人間の知恵は、ほとんど価値がないか、または、全く無価値である (to de kinduneuei, ó andres, tōi onti ho theos sophos einai, kai en tōi chrēsmōi toutōi touto legein, hoi hē anthrōpōi sophia oligou tinos axia estin kai oudenos.) とつてつてを自覚したものだ、という意味のことをのべてゐるのである、ということを知った。

このようにして、かれは、自己の無知の自覚と、神は真の知者、真理の洞見者であるとの認識と確信に達すると同時に、かれ自身、真知 (ἐπιστήμη || epistēmē) に到達するように努力するとともに、かれ以外の人々、わけでも、アテナイの青年たちを援助して、その無知であることを指摘し、まず、無知の自覚をさせることが、神託の要求であると考えた。しかも、これを契機に、自からも、アテナイ市民とともに、問答法 (ἀνακρίσις || dialektikē) を用いて、真知に到達するように努力した。

いや、このことが、<sup>(1111a)</sup>「神に従ふこと (kata ton theon)」であるとし、この使命観に立つて、この使命達成のために、かれは、懸命の努力をした。

かれにとって、神は、真の知者、真理の洞見者である。また、かれにとって、「神に対する奉仕以上に、いかなる偉大な善 (meizon agathon) も、この国において、いまだ生じなかつたこと」<sup>(110a)</sup>であり、神の命に従ふこと、神々に奉仕すること、つまり、神の命ずるところに従つて行為することが、善のうちで最大のものではあつた。

しからば、かれは、国家の命ずる神々を信じ、その一挙手一投足は、国家の命ずる神々のままに、無知の知、すなわち、神の善に、自分とアテーナイ市民を導くことが、緊急、不可欠なことであった。かくては、かかる、かれは、犯罪者ではなく、善き人であるはずである。したがって、自分を犯罪者として、死刑を宣告した輩は、自分を処刑することによって、「ソークラテースという、神から授けられた賜物 (hé tou theou dosis) にあやまちを犯す輩」であり、かれに、死罪を宣告することによって、「かえって、真理のために (hupo tēs alētheias) 兇悪 (mochtheria) と不正 (adikia) の罪を負わされる輩」である。<sup>(三九B)</sup>

また、かれらが、かれを処刑するということは、要は、いまのべた輩から、死罪、すなわち、不正を加えられることであって、自分が処刑されて、この世を去るのは、正義としての国法にもとづいて処断されるのではなく、まさに真理から賤劣と不正を受くべき人間どもから、不正を受けて、この世を立ち去ることなのである。<sup>(三九B)</sup>

このような確信に立つかれにとっては、たとい、死刑の宣告をされたとしても、全く国法を犯した犯罪者としての意識はなく、神につかえる使徒 (homodoulos)<sup>(八五B)</sup>として、青年の腐敗をとどめ、神々を深く信ずるものとして、自から善き人であるという確信に立つことができた。しかも、かれによれば、このような善き人には、「生きているときも、死んでから後も、悪いことは一つもありえないのであって、その人は、神々の配慮をうけない」ということはない (ouk estin andri agathoi kakon oudēn oute zōnti oute teleutēsanti, oudē ta ena nun apo tou automaton gegonen.)<sup>(四一D)</sup>のである。「善き人々に対しては、悪しき人々よりも一段と善うこと (polu ameion tois agathois ē tois kakois) があるという楽しい希望 (eulēpis) をもつ」<sup>(六三C)</sup>ことができるものでさえあった。

ソークラテースにとって、「善き人に悪しきものなし (ouk estin andri agathoi kakon oudēn.)<sup>(四一D)</sup>という確信は、いかなる場合にも、「不正に報いるに不正をもってすべきではない (oude adikomenon ara antadikēin.)<sup>(四九B)</sup>」とか、「人はど

んな場合でも、不正を行ってはならない (oudanós dei adikēn)<sup>(四二六)</sup>』という、かれ自身の金言とともに、千金の重みをもつ確信であった。

二、つぎに、かれが死を恐れず、従容自若としていたのは、かれの、いわゆる、「もしも、わたしが、この世の神とは異なる、賢明にして、善良なる神々のいますところへいこうとしているものであり、さらに、そのうえ、この世の人々よりも、一そうすぐれた、いまは亡き人間たちのもとへいこうとしているものであるということを信じなかったとすれば、わたしが死ぬことを悲しまないということは誤りであろうと、かれがいつている (egō gar, ei men mē oimēn hēxein prōton men para theous allous sophous te kai agathous, epēta kai par' anthrōpous teteleutēkotas ameinous tōn enitade, eūikoun an ouk aganakton toi thanatō)<sup>(四二七)</sup>』ことからわかるように、かれが、いま旅立とうとするあの世<sup>(一八A)</sup>ハデーース (Aïōn<sup>(一八A)</sup> || Haidēs) は、一段と高次の神々や、人々のいます国であって、裁判が行われるとしても、ただ、正しいことをいつているかどうかを観察し、注意を払うことだけに専念することのできる裁判官の徳 (dikaston aretē)<sup>(一八A)</sup>をそなえた、真誠な裁判を行える裁判官たち (dikastai) のいるところであった。そこでは、いかに人間吟味が行われても、死刑という不当な手段によって、口を封ぜられるということがなく、その存分に行える、死のない、不死なるものたち (athanatos) の世界であった。死刑のないところであった。<sup>(四一C)</sup>

とにかく、ハデーースは、ソークラテースにとって、現世より一段と次元の高い国であり、憧憬の国であった。したがって、死は、かれにとって、あこがれの国への旅立であり、ハデーースへの旅立は、喜びであり、幸福であり、「この世から、あの世への転生であり、転居 (metabolē kai metoikēsis tei psuchēi)<sup>(四二八)</sup>」であって、死は新しき生への出発であった。そのうえ、この世で互に争ってきたものと縁が切れ、魂が人生の困苦 (pragmata) から自由になり、解放されることであり、人間の本源的なものへの帰国であった。<sup>(四一D)</sup>

三、さらに、かれに、死刑の判決に、従容として従わせたのは、何かしようとするときに、それを抑止すること以外には働かない (thē hotan genētai, aei apotrepei me touto ho an nullo pratein, protrepei de oupote.)<sup>(三1a)</sup>、良心 (Gewissen) の声ともいうべき、一種の声 (phone)<sup>(三1b)</sup>、すなわち、神の声<sup>(三1c)</sup>、神のお告げ (daimonion)<sup>(三1d)</sup> が、聞えなくなつたからである。

それは、服罪せよと命じていることであると、考えさせたからである。

四、それにしても、かれが、死刑を前にして、従容自若、解放感と幸福感にあふれることができたのは、根本的には、自から哲学者 (philosophos) であるとの自覚に立っていたからであつたと結論づけることができると思う。

さて、ソークラテースが、自から哲学者であるという自覚に立っていたことは、「一方、哲学こそは学芸 (mōnē<sup>(四1a)</sup> = mousikē) の中で最高のものであり、他方、わたしは、それに従事していた (philosophias menousēs megistēs mousikēs, enou de touto prattontos.)<sup>(四1b)</sup>」という言葉や、哲学者とは知 (sophia<sup>(四1c)</sup> = sophia) を愛し求める (phileō<sup>(四1d)</sup> = phileō) とであり、この「哲学によって純化すること (hoi philosophiai kathēramenoi.)<sup>(四1e)</sup>」すなわち、哲学の営みを自己の使命としている、という言葉からしることができる。

さて、知を求めてやまぬ哲学者、知恵の獲得を直接の関心事としている、哲学の営みとはいかなることを意味するであろうか。

かれは、それを、「真理 (alētheia<sup>(五1a)</sup> = alētheia)」、真実 (tō alēthēs = to alēthēs) をはっきりと観得することができ (dunasthai hup' autou kathoran talētes)<sup>(五1b)</sup>」ことができる、とする。そして、このことは、まず、魂 (ψυχή<sup>(五1c)</sup> = psuchē) Ⅱ 靈魂 Ⅱ 精神 Ⅱ 心) に関することであるとする。つまり、肉体 (sōma) と魂とが分離すること、すなわち、「一方、肉体が魂から離れて肉体だけとなり、他方、魂が肉体から離れて魂だけとなる (chōris men apo tēs psuchēs apalla-

gen auto kath' hauto to sōma gegonenai, chōris de tēn psychēn apo tou somatos apallageisan autēn kath' hautēn  
 (六五C) einai.」<sup>(六五C)</sup>「いかにたゞ、魂を肉体との結びつき (koinōnia) から解き放す (maīsta tēn psychēn apo  
 tēs tou sōmatos koinōnias diapherontōs)」<sup>(六五A)</sup>「<sup>(六五A)</sup>」からにはじめるとする。とういうのは、肉体は、「いたるところで、真理  
 の探究をせよ」<sup>(六五A)</sup>、騷擾 (thorubos) をなす、混乱 (tarachē) をひきおこす。そのために、真実を明瞭に観得する  
 ことをせよとなすから (en tais zētēseis pantachou parapipton thorubon parechei kai tarachēn kai ekplētei, hōste  
 mē dunasthai hup' autou kathorān talēthes,)」<sup>(六五D)</sup>「<sup>(六五D)</sup>」からである。このために、「魂が、肉体と一緒に考えようとする」と、  
 ういうのも、それは、明瞭に、肉体にまぎれあひまかれる (hotan men meta tou sōmatos epicheirēi ti skopein, delōn  
 hoi tote exapatātai hup' autou.)」<sup>(六五B)</sup>のである。すなわち、肉体は悪 (kakos) とわかちがたく結合して、「われわれが求  
 めてやまぬもの、すなわち、『真実』に、完全に到達する」ことをせよとなすものであるものだからである (ou mē tote  
 ktēsōmetha hikarōs ou epithumounen phanēn de touto einai to alēthes.)」<sup>(六五A)</sup>。  
 とういうのは、まず、肉体は、一方では、養いが必要とするものである。その限り、物質的欲望を満してやらねばな  
 らない (muriās men hēnin aschōlias parechei to sōma dia tēn angkaiān trophēn.)」<sup>(六五B)</sup>。そして、そのうえ、「他方、病  
 気になると、それらは、われわれの真理の追求を阻む (ei de an tines nosoi prosposōsin, empodizousin hēmōn  
 tēn tou ontos thetān.)」<sup>(六五C)</sup>。さらに、肉体は、「恋情や欲望や恐怖、そして、あらゆる種類の幻想や愚かしきことでも  
 して、われわれの心を一杯にする (erōtōn de kai epithumōn kai phobōn kai eidolōn pantodapōn kai phylarias  
 empiplēs hēmās pollēs)」<sup>(六五C)</sup>のである。総じて、精神的な情念によって、われわれの心を充満させて、全くわれわれ  
 に考えることができなくさせる。なお、さらに、「すべての戦争は、財貨を獲得することのために起ったことであ  
 り (dia tēn tōn chrēmātōn ktēsīn pantes hoi polemoi gignontai.)」<sup>(六五C)</sup>、この「すべて、肉体に発する欲望は、精神的な

ものであれ、物質的なものであれ、閑暇 (scholē) を奪って、われわれに、哲学に専心することを不可能にさせる<sup>(六六C-D)</sup>。要するに、肉体は欲望や情念の発源地であって、肉体の悪なるゆえんは、考えるゆとりや、真実を明瞭に観得すること、すなわち、哲学に専念させることをできなくさせるところにある。

しからば、「もしも、われわれが、いつでも何かのことについて、絶対に知ろうとするならば(＝何らかの明晰な知を得ようとするならば)、われわれは、肉体からはなれ去って(＝自由になって)、魂の眼だけでもって、實際の事柄を観てとらなければならない (ei melomen pote katharōs ti eīstesthai, apallakteon autou kai autēi tēi psychēi theateon auta ta pragmata.)」のように、「できるだけ、魂を肉体から切り離すこと、そして、魂が、肉体をあらゆる箇所から離して、それ自身のうちに凝集し、結集して、そのできるかぎり、現在も将来もともに、縛めから自由になるように、肉体から解放されて、生きつづけるように、習慣づくように導くこと (to chorizein ho ti malista apo tou sōmatos tēn psychēn kai etisai autēn kath' hautēn pantachōhen ek tou sōmatos sunageiresthai te kai athroizesthai, kai oikein kata to dunaton kai en tōi nun peronti kai en tōi epeita monēn kath' hautēn, ekluomenēn hōsper ek desmōn ek tou sōmatos)」<sup>(六七A)</sup>、魂の解放 (lusis psychēs) をつねに切望してやまないのが、(中略)ただ真正の哲学者たち (hoi philosophountes orthōs) だけであって<sup>(六七B)</sup>、哲学するものの心がける仕事は、魂を肉体から切り離すこと (chorismos psychēs apo sōmatos)<sup>(六七C)</sup>、すなわち、「浄化 (katharsis)」であると<sup>(六七C)</sup>する。そして、一般に、「魂を肉体から解放し、切り離すことが、死 (θάνατος = thanatos) と呼ばれるものにほかならない<sup>(六七D)</sup>」。しからば、魂が肉体から離れて、魂だけになるということは、死ぬことである。

かくして、かれにいわせれば、「真正に哲学している人たち(＝真の哲学者たち)は、死ぬことを練習している (hoi orthōs philosophountes apothnēskein metelosi)」ものである。いや、真正に哲学を追求している人たちは、



「死んでいく」(ἀποθνήσκειν = apothnēskēin = dying) と、死んでしまうこと = 死を完成すること (τεθνάαι = tethnāai = being dead = a state of death) であって、「死を完成することを練習 (τεθνάαι μελέτησαι = tethnanai mele-tōsa) しているものである。

それゆえ、自から真の哲学者であるとの自覚に立つソークラテースにとって、とくに、全く、犯罪者でないという確信に立つかれが、刑死という死に直面したからといって、「自分の全生涯を、できるだけ、死を完成することにつながるように、自分自身を習わせてきたものとして、死がやってきたときに、そのさい、心をかき乱されるとすれば、おかしなことである (geloion an eiē andra paraskēuazontē heauton en tōi biōi ho ti eggutatō onta tou tethnāai houtō zēn, kapeith' hekontos autōi toutou aganaktein.)」。

とにかく、かれにいわせれば、哲学者は、魂を、肉体から解放しなければならぬ。死ななければならぬ。そして、情欲や情念から解放され、脱出して、真実をなげなければならぬ。魂のはたらきである知恵 (σοφία = sophia) をもって真実をなげなければならぬ。

しかし、かれは、魂が、人間の肉体の中にやってきたときに、すでに魂にとって、病氣 (nosos) のように、滅亡 (olethros) がはじまっている (auto to eis anthrōpou sōma elthein archē ēn autēi olethrou, hōsper nosos) とうろく。というのは、肉体は、目にみえるもの (horaton) 、『すなわち、経験界のものであり、『人間的なもの、死ぬべきもの』、いろいろな種類のかたちをとり、非知性的なものであり、分解さるべきものであり、いつでも恒常を保てぬもの (tōi anthrōpinōi kai thnētōi kai polueidei kai anōtōi kai dialutōi kai mēdepote kata tauta echonti heautōi homoiōtaton au einai sōma.)』であって、『屍体 (nekros) 』というものとなり、それは、『自然に分解し、非合成的なものになるもの (prosekei dialūesthai kai diaptrein) 』である。すなわち、肉体は、もういものであって、『分解 (消

滅)をまぬかれな<sup>(ハOB)</sup>く (dialutos)」もの、「死の運命にある (onētos)」もの、「非知性的な (anoētos)」もの、「支配を受くべき、隷属的な、死の運命にあるもの (to thnēton archesthai te kai douleuein)」<sup>(ハOA)</sup>である。形而下的なもの (phusis) である。

しかるに、かれは、魂をもつて、「神的なもの、不死なもの、知性的なもの、単一な形相をもち、分解されないもの、つねにそれ自身のあり方を保つていて恒常的なもの (toi theioi kai athanatoi kai noētoi kai monoidei kai adialutōi kai aei hōsaūtos kata tauta echonti heautōi homoiotaton einai psuchēn)」<sup>(ハOB)</sup>であつて、「支配し、主導する」と (archein kai despozein)」を本来の性格としているものであつて、形而上的なもの (metaphusis) であるとする。

このように、かれは、魂を肉体と対蹠的なものとしてとらえ、「魂は、人間が死ぬときには、運命をともしないもの (hōs tou apothanontos ou sunapothnēskei hē psuchē)」<sup>(ハOA)</sup>であるとする。

しかし、かれが、魂が、その滅亡から脱出するために、死への道をいそしまなければならないとするゆえんのもの、何か。

それは、すでにのべてきたところからわかるように、ハーデースへいき着きたい、転居、転生をしたいからである。

しかも、それをよろこびとし、希望させるゆえんのもの、何か。

それは、哲学するものにとつて、もっとも大切な、魂は不死不滅であり、魂はハーデースのみ、真実を直観することができ、真実な生き方ができ、「神々の種族に (eis theōn genos)」<sup>(ハOA)</sup>に帰一することができるからである。いや、これにとつて、肉体的に死ぬことは、真実に生きることである、と信じていたからである。

ところで、かれは、われわれ一般が、常識的に、生の世界、生き甲斐のある世界と考へているこの世を、欲望と情

念の、汚辱に満ちあふれている不浄な死滅を、そののがれがたい運命として背負っている肉体とともにある世界とみ、それは死の世界、非真実な世界であると考えている。それに反して、あの世Ⅱハーデースは、神の特性である不死不滅なものの住む世界であり、不死不滅な魂の転居、転生すべき、真の故郷であり、神の種族に帰一し、神々と共に住むことのできる世界であるとした。

それにしても、なぜ、かれは、ハーデースに至ることを、これほどよろこび、この世界こそ、真に生くべき、真の世界であるとしたのであろうか。

それは、かれが、深い、真正な哲学者としての自覚に徹したからであらうが、その中核をなしているものは、かれの、魂の不死不滅に対する形而上学 (Metaphysik) 的な確信であったと思う。

そのことを、かれは、まず、(一)、魂は、肉体のように、合成することによって、その生存、存在を獲得するものではなく、それ自身で存在することができ、分解不可能なものであり、消滅的なものでなく、不可死的、神的なものである、とする。つぎに、(二)、各人の魂は、「この世から、あの世に到り着いて、そして、再び、この世、死者たちの世界から生れかわる (eisin enthende aphikomenai ekei, kai palin ge deuro aphiknountai kai gignontai ek tôn tethneōton) <sup>(+OC)</sup>」ものである。したがって、「もしも、生きている人々が、少くとも、再び死者から生れてくるとすれば、われわれの魂は、あの世に存在するであらうか、しないであらうか (palin gignesthai ek tôn anpōthanōton tous zōntas, allo ti ē eien an hai phuchai hēmōn ekei) <sup>(+OC)</sup>」と自問自答し、「われわれの魂は、ハーデースに存在する (ai phuchai hēmōn ēu "Aïdou, = hai psuchai hēmōn en Haidou) <sup>(+OC, +1a)</sup>」とする。しかも、「もしも、一方、すべて生命をもっているものが、死んでいって、他方、死んだものが、そのままの状態にとどまるとすれば、最後に、万物はみな死んでしまつて、何にも生きていないということは、必然なことではないか (ei apothnēskoi men panta, hosa tou, zēn met-

alaboi, epeidē de apothanoi, menoī en toutōi tōi schēmati ta tethneōta kai mē palin anabioskoito, ar' ou pollē angkē teleutōnta panta tethnanaī kai mēden zēn:]」<sup>(4110)</sup>と云へて、人間が、つぎつぎと生まれてくるのは、魂の転生によるものであつて、魂は生そのもの、生命そのものであり、魂の不死であることを示すものである、とする。そして「生きかえるということも事実であり、生きている人々が、死者たちから生まれてくるということも、そして、死んだ人々の魂が存在し続けるということも、本当にあることである (esti tōi ontu kai to anabioskesthai kai ek tōn tethneōtōn tous zōntas gignesthai kai tas tōn tethneōtōn psuchas einai)」<sup>(4110)</sup>と結論づける。

かくして、魂は、いつでも、いつまでも生きつづけるものであつて、生の原理を自分自身の中にふまえているものである。

さらに、(三)、肉体が生命をもつようになるのは、肉体の中に、魂が何かをもつようになるからであつて、それ(魂)は、つねに、生をもたらしものである (Hē psuchē hoti autē katascēi, aei hēkei ep' ekeino pherousa zōen.)<sup>(1050)</sup>」。

ところで、生(zōē)は、死(tanatos)の反対なもの(enantion)<sup>(1050)</sup>である。しかば、「さて、魂は、決して、それと一緒にもつてくるところのものを受け容れないであらう (Oukoun psuchē to enantion hōi autē epipherei aei ou mē pote dexētai)」<sup>(1050)</sup>。

このような、死を受け容れないようなものは、何と呼んでよいであらうか。

それは、<sup>(1050)</sup>「不死(athanaton)」と呼ぶべきであるとする。しかば、「魂は不死なるもの (Ἀθάνατον ἡ ψυχή. = Athanaton hē psuchē)」<sup>(1050)</sup>だということになる。また、不死なるものは、永却に生きつづけるものであつて、消滅を受け容れるということはないのである。かくして、不死なる魂は、不滅でなければならない。

このことを、ソークラテースは、「もしも、不死なるものは、不滅なものであるということが認められるとすれ

ば、魂は、不死なるものであると同時に、不滅なものである。(ei men hēmin homologētai kai anōlethron einai, psuchē an eie pros tōi athanatos einai kai anōlethros.)<sup>(10KJ)</sup>と、魂の不死不滅を論証するとともに、魂は生そのもの、

生命の原理そのものであるということを強調している。

なお、さらに、四、かれは、想起 (ἀνέμνησις = anamnēsis) という概念を提起することによって、魂の不死不滅をのべている。

かれによれば、——われわれが、普通「学<sup>(μάθησις)</sup>」といっていることは、じつは、新しく何かを知得することではなく、われわれが知得していたこと(＝ずっと以前のある時に [en proteroi tini chronōi]<sup>(711a)</sup> 知っていたこと)を想起することであり、このこと以外の何ものでもない (hēmin hē mathēsis ouk allo ti ē anamnēsis tugchanei<sup>(711a)</sup>)。ただ、われわれが、想起をするとき、似ているものから (aph' homoion) 想起する場合と、似ていないものから (apo anomion) の場合とがある、とする。かくして、かれは、ここで、想起にとって大きな役割を果たすものの一つとして、経験<sup>(ἐμπειρία)</sup>をあげる。そして、その限り、経験は、かれをして、「その種<sup>(γένος)</sup>のことは、一種の想起である (to toutouton anamnēsis tis esti.)」<sup>(711a)</sup>とさせる。

また、「等しいものの (to ison)<sup>(75A)</sup>」を心にいだくための手がかりとなるものは、——すなわち、この知識をえさせるものは、等しいものを「見たり、触れたり、あるいは、何かほかの感覚で感じたりする以外には不可能である (…mēde dūnaton einai ennoēsai, all' ē ek tou idein ē hapsasthai ē ek tinos allēs tōn aistheseōn.)」<sup>(75A)</sup>。かくして、感覚 (aisthēsis) もまた、想起のための一つの大事な型態である、とする。

しかし、魂の想起するものは、われわれがこの世に生まれる以前にえた知識であって、超経験的、超感覚的なものである。すなわち、『美そのもの』や『善そのもの』、『正義』や『敬虔』など、さらに、わたしがいつもいっている

るように、われわれが、問と答の間答の中で、『まさにそれ自体であるところのもの』という刻印を押すところのものについて (peri autou tou kalou, kai autou tou agathou kai dikaiou kai hosiou, kai, hoper legō, peri hapantōn hōtōs epiphragizometha to hō estī, kai en tais erotēsesin erotōntes kai en tais apokrisisin apokrinomenoi) の知識 (epistēmē) を、生まれる以前に (pro tou genesthai) えているのである。かくして、かれが、「われわれがものを学ばと呼んでいることは、じつさう、もともと、われわれのものであった知識を取り戻すことになるのではないだろうか (ἀρ' οὐχ ὁ kaloumen manthanein oikeian epistēmēn analambanein an eie;)」このべつ、かれの想起の意味は、もともと、自分のものであった知識を手に入れ直すことである、とする。

とにかく、魂は、知識 (epistēmē) をつかむもの、知力をもつもの (＝思慮＝phronēsis) である。

まさに、人間が想起できるということは、魂は肉体に宿る以前に存在し、知力をもっているものであるからである。

また、かれは、「もしも、われわれが、いつも口にしてゐるように、『美』が存在し、『美』や、すべて、そういった實在 (ousia) が存在するものであるとするならば、そして、もしも、われわれが、そういう實在が、かつては、自分のものであり、いまも、われわれのものであることを発見し、これらのものに對して、われわれの、あらゆる感覚される事物を照し合わせるならば、これらの抽象化されたもの (＝實在) が存在するのと全く同様に、ちょうど、それと同様に、われわれの魂は、われわれが生まれる前に存在していることにならなうか (ei men estin ha thnoulomen aei, kalon te kai agathon kai pāsa hē toiautē ousia, kai epi tautēn ta ek tōn aisthēseōn panta anapheromen, huparchousan proteron aneuriskontes hēmeteran ousan, kai tauta ekeinēi apelikazomen, anagkaion, hōtōs hōsper kai tauta estin, hōtōs kai tēn hēmeteran psuchēn einai kai prīn gegonenai hēmās ei de mē estī tauta,

allós an ho logos houtos eirēmenos eîē.)」とか、「もしも、これらの事物（＝實在）が存在するとすれば、われわれの魂もまた、われわれが生まれる以前に存在したし、また、もしも、これらのもの（＝實在）が存在しないとすれば、われわれの魂もまた、存在しないということは、同じように必然なことではないか（*isē anagkē tauta te einai kai tas hēmeteras psuchas prin kai hēmās geronēnai, kai ei mē tauta, oude tade.*）」とのべて、<sup>(十六E)</sup>實在が、われわれの存在以前にあり、魂は、その實在を認識することができ、また、それを想起できるとすれば、實在が不死不滅なものであるように、魂は人間の存在以前にあり、魂は不死不滅である、とする。

そして、このことを、「もしも、君たちが、この想起説による議論（＝この結論）と、その前にわれわれが到達した、すべて生あるものは、死んだものから生まれるという議論とを結びつける氣持になつてくれたならば（*ei thelete suntheinai touton te ton logon eis tauton kai hon pro toutou hōmologēsamen, to gignesthai pān to zōn ek tou teth-neōtos.*）」とのべて、<sup>(十六D)</sup>かれは、魂は生前にも、死後にも存在し、魂は、不死不滅であるということが帰結されるであらう、とのべる。

ともかく、ソークラテースをして、これから、この世を去つて、この世を支配する神々とは格段とがって、賢明にして、善良な神々のもとへいこうとするのが、うれしくてたまらないという氣持にさせるのは、かれは犯罪者ではなく、善き人であつて、善人には、悪しきものなしという確信と、魂は不死不滅であり、真に、人間として生きるに価する世界は、神の世界であるハーデースであり、そこに到り住むことであると信ずることができたからである。

いや、もっと、根本的には、肉体から解放されたときに、すなわち、われわれの常識的な意味での死んだときに、かれによれば、情欲や情念から脱出、解脱して、淨化された魂の眼をもつて、真実、真理を洞見することができる、魂による最高、最善に完成された生活ができるという心境に、形而上学的に到達したからであると思う。

人間の真実な生き方、人生の真理を深く思索しつづけたかれが、真実、真理の探究者、真誠な哲学者として、哲学的に、以上の境地に到達したからであると思う。いな、かれは、真正な哲学者として、理念的に、哲学的、形而上学的に、以上の境地に昇華したからであつたと思う。

しかし、果たして、アテーナイと、その市民を限りなく愛したかれ、市民の哲学的覚醒に、必死の、渾心の努力を傾けて、うむことをしらなかったかれ、そのかれが、この世、とくに、アテーナイを、生きるに価しない世界と考えたであらうか。——いや、むしろ、そのように考えることは、当をえないと思う。

ことに、かれは、哲学者の責務は死ぬことと、死を完成することであるといひながら、「神々は、われわれの世話役であつて、われわれ人間は、神々の家畜のひとつである (to theos einai hēnōn tous epimeleuous kai hēmās tous anthrōpous hen tōn ktematōn tois theois einai.)」とか、「<sup>(K11a)</sup>もしも、君 (|| 神) の家畜たちの中のあるものが、君が、それに、死んでしまうことをのぞむと命じない時に、自殺するといふことがあるとすれば、君は、きっと怒るだらうし、また、もしも、君が罰することができるとすれば、処罰するでもあらう (su an tōn sautou ktematōn ei ti auto heauto apokinnuoi, nē sēnēantos sou hoti boulei hauto tetnanaī, chalepainois an autōi, kai ei tina echois timōrian, timōrio an.)」<sup>(K11c)</sup>といつて、自殺を否定し、神が人間に命ずるまで、生きつづけるべきものであるとして、人間の、現実生きるべきことを勧め、現実を肯定し、この世における哲学者の責務を、市民が哲学に覚醒し、それに、いそしみながら、神の命のあるまで、生きつづけるべきことを第一義とすべきことを強調していることは、——思ひみるに、簡単に、かれは、現実を否定していたということにはならないし、また、われわれは、そのように結論づけることは、早論にすぎると思う。

われわれは、このことについて、さらに、改めて、慎重な論究をしなければならないと思う。いや、したいと思



う。(一九六四・二・二〇)

主なる参考文献

The Loeb Classical Library

1. *Apologia Sōkratous* (二七A—四二A)

2. *Kritōn* (四三A—五四E)

3. *Phaidōn* (五七A—一一八E)

John Burnet, *Platonis Opera* (*Apologia Sōkratous, Kritōn, Phaidōn*)

*Diels, Fragmente der Vorsokratiker*

久保 次郎訳 プラトン ソクラテスの弁明・クリトン

阿部 次郎訳 プラトン ソクラテスの弁明・他一篇

山本 光雄訳 プラトン ソクラテスの弁明・他一篇

田中美知太郎訳 プラトン ソクラテスの弁明・パイドン

菊池 豊一郎訳 プラトン パイドン